

2020 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

ことばとはなんであろうか。むしろことばとは、どのように成立しているのであろうか。

現代の日本語を例にとつて考えてみよう。ことばを入出力として見た場合、入力は音声か、文字である。だからこれをそれぞれ聴覚言語、視覚言語という。出力は、要するに筋収縮である。ただし点字は触覚言語で、手話は視覚言語の別な形である。

現代の言語のきわめて興味深い点は、この聴覚言語と視覚言語が完全に共通だということである。これもあまりにも当然で、いわれてもなんのことか、気づかない人が多いであろう。つまり耳から聞いても日本語だし、同じことを文字で読んでも日本語だということである。それならたとえば日本語文法というのは、目でも耳でも共通に理解されているということである。そこから言語が逆に定義できる。ある脳について、視覚と聴覚の共通の情報処理規則が言語ではないか、ということである。

あなたが日本語をまったく知らないとしよう。そのあなたが日本語を聞いても、雑音の連続にしか聞こえない。さらに日本語の新聞を見ても、むちゃくちゃなシミの連続にしか見えないはずである。ところが、日本語という情報処理規則を持っていると、つまりコンピュータでいうソフトを持っていると、なんと新聞がちゃんと読める。読めるといふことはつまり、音声にも翻訳できるといふことである。さらに、耳からジュンジ入ってくる、たいへん奇妙な雑音の連続が、ちゃんと情報処理されて、日本語として聞こえ、意味内容が把握される。ところが文字も音声も、どちらも同じことを伝えているのだから、目と耳の共通の処理規則としての言語、という言い方が、それなりにご理解いただけるであろう。

目と耳は、もちろん離れた場所に位置している。そこからの入力は、つぎに中脳に到達する。ここでは両者の領域は上下に隣り合う。つづいて大脳皮質にあがってくるが、そこでは両者はいわば一部重なり合ってしまう。そこに言語が生じる。そう考えることができる。

運動系から音声や文字を表出することによって、ヒトは言語という特殊なコミュニケーションの手段を手に入れた。これは入出力の連合という形で、まず一個の脳のなかで生じたはずである。これが生得的機能としての言語といわれるものであろう。そ

の形式は、本質的には決定されている。ついで、右に述べたように、表出が行われる。表出された記号は、他の脳にも同様なものとして理解される。その過程は教育的、すなわち後天的である。そこには言語の恣意性が発生する。これはどのように説明されるか。

ソシユールのいわゆる言語の恣意性は、言語が視聴覚を連合する体系的な規則であることから生じる。魚は日本語の音声ではサカナ、英語ではフィッシュ、フランス語ではポワソンと呼ばれる。これは魚自体とはなんの関係もない、無意味な音声である。⁽²⁾これが言語の恣意性と呼ばれるものである。

それに対して、われわれは「パシャン」といった音声を考えることができる。これは魚がはねた音である。同時に魚という漢字は、サカナという無意味な音声に相当する、いまでは無意味な形である。すなわち恣意的な形である。ところがもともこれは、サカナの具象的な形が変化して、こうした文字に変わったものである。⁽³⁾音声上のパシャンがサカナになり、サカナの絵が「魚」という恣意的な記号になるについては、あきらかな規則が認められる。

すなわち魚の具象的な絵は、目でしか理解されない特質をそこに含んでいるということである。その特質は聴覚系によっては把握され得ない。同様にして、パシャンという音は、聴覚によってしか把握されない魚の特性である。これが魚のはねる音だからである。

近代言語が視覚系と聴覚系の共通の情報処理規則として成り立つという原則からすれば、そうした諸感覚に固有の特性は、言語の体系からは排除されていかななくてはならない。さもなければ、聴覚系の情報処理と、視覚系の情報処理は、「共通規則」として成立しないからである。

だから言語の進化とは、じつは聴覚系、視覚系に特有の性質が、言語から「落ちていく」過程なのである。だから漢字は、具象的な記号から、抽象的な記号に「進化」するのである。だから擬音語は、幼児のことばなのである。ワンワンもニャアニャアも、耳でしか理解できない、イヌとネコの特性を表している。これはいわば音楽的表現であり、言語的表現ではないのである。

ヒトが視聴覚という異質の感覚を結合して言語を創り出したことは、進化的にはきわめて重大な事件だった。それを否定する

人はないであろう。その結合が同時に、ヒト間のコミュニケーションを「分節的に」保証し、われわれはわれわれの社会を手にしたのである。

ここでつけ加えておくべきことがある。それは日本語の読みである。日本語の読みは、世界の他の言語に比較して、いささか変わった位置にある。それに気づいたことがあるだろうか。

たとえば「重」という漢字がある。これは「ジュウ」と読むが、ただそういつたのでは、もちろん不正確である。「重大」「重要」なら、読みはたしかに「ジュウ」だが、「重複」なら「チョウ」である。それどころではない。重「い」と送りなをすれば、読みは「オモ」だし、重「ねる」と送れば、読みはなんと「カサ」である。これでは私がたとえ(4) だったとしても、その非論理性に腹を立てるであろう。フランス人なら、これは悪魔のことばだ、と叫ぶに違いない。(5) こんな言語規則に素直に従っているから、日本人は権威に弱いのだ。そうつけ加えるかもしれない。これぞ日本語独特の発明、音訓読みである。

脳の障害で、失読症が生じることがある。つまり脳の一部分が壊れると、字が読めなくなる。これを失読という。ところがこの症状で、日本人だけに妙なことが起こる。失読症が二種類生じるのである。つまりカナ失読と漢字失読である。ある人はカナだけが読めなくなる。他の人は、漢字だけが読めない。カナだけが読めなくても、まあ新聞なら中国語の新聞を読んでいるようなものである。しかし漢字が読めなくなると、小学校以前にタイコウしたことになる。(6) 新聞のカナだけ拾い読みしたのでは、どうにもならない。

もうおわかりであろうが、二種類の失読症が生じるといふことは、字を読むために、日本語では脳の二カ所を使っていることを意味する。一方はカナを読む場所、他方は漢字を読む場所である。

世界に冠たる奇妙な読み方は、日本語の漢字読みである。それなら、世界のほかの人たちが使わないで、日本人だけが字を読むのに使っている場所が脳にあり、それがすなわち漢字を読む場所ではないかというスイソクが成り立つ。(7)

世界一般に、失読が起こるのは角回カクバの障害とされている。角回というのは、角張った回転という意味で、回転というのは脳のシワ、溝と溝との間の平らな部分である。大脳皮質には、カイボウ学的に(8) そういう名前をつけられた場所がある。その障害で、

万国共通に失読が生じる。ただし日本人では、角回の障害で生じるのは、カナ失読だけである。われわれは漢字を、それとは別な大脳皮質の部位で読むらしい。

それがどうした。どうしたもこうしたも、そこから生じる重要な帰結が、いくつかあると思われる。

第一に、日本語は視覚言語、すなわち「読み」がきわめて重要な言語だということである。なにしろ読みのために動員している脳の広さが、外国の人とは段違いなのである。だから昔から、日本の教育は「読み書き算盤」ではないか。古代ギリシヤ人は、雄弁術を習うために月謝を払った。フランス人は、いまでも言語の本質は音声だと固く信じている。ことほどさように西欧語はあくまでも音声中心だが、日本語は違う。その日本語の常識で外国語を勉強するから、日本人は「読めるけど、しゃべれない」という症状を引き起こすことが多い。それを日本の英語教育が悪いと非難するのは、ピントが外れている。脳から見ても、日本語と外国語は違う。それをまず認識すべきなのである。日本語でできあがった脳は、外国語をどうしてもまず「読んでしまう」のである。

もう一つ、日本人の漫画好きである。これが音訓読みと決定的に関係することは、十分に意識されていない。先ほどの「重い」にルビを振った例を考えてみよう。これはじつはすでに漫画なのである。おわかりだろうか。

それは高橋留美子の『うる星やつら』の「コマを見れば、すぐにわかる。錯乱坊つまり愛称を「チェリーと呼んでください」という坊主がいる。これもまたすでに漫画になっているのだが、それは後のこととして、この坊主が大きな声で怒鳴っているコマがある。吹き出しがあつて、そのなかに「揚豚」というむずかしい漢字が入っている。それにさらにルビが振っており、そのルビとは、「カツ」なのである。揚げた豚だから豚カツで、だから「カツ」と坊主が怒鳴っていることになる。

これ自体がどうして漫画か。「揚豚」はある意味を持った抽象図形である。つまり漫画の絵と同じものである。絵じゃないよ、字じゃないか。だから漢字のものは絵だという説明をしたではないか。

漫画は原始的な漢字と同じものなのである。それに「吹き出し」という音が振つてある。つまり漫画の吹き出しとは音声、すなわち漢字のルビなのである。そう考えれば、「カツ」というルビつきの「揚豚」は、まさに漫画そのものだとして理解できるであ

ろう。

このことから理解できるのは、日本の漫画とは、じつは漢字の音訓読みの能力を利用したものだということである。音訓読みという変なことを、世界の他言語はやっていない。だから脳のその部分をこういうことに使っているのは、おそらく日本人だけかもしれない。つまり小学校の国語の先生は、子どもたちに日本語の漢字の音訓読みを教える。その結果、脳からいうなら、子どもたちの脳に、漫画を読む訓練を徹底的に施している。そしてなにをいうかと思えば、子どもたちが漫画ばかり読んで、じつに嘆かわしいという。これを天に向かってツバキする、という。

なぜ文化現象として、日本で漫画が流行するか、こう考えてみれば、よく理解できる。それを外国人が理解できないのは、むしろ当然であろう。脳というモノサシを置くことによって、われわれはこうして、いわゆる文化の違いに一定の基準を見つけておくことができる。それなしに、ただ漫画のコウザイを社会的に論じ、外国語教育を論じてみても、あまり有効ではないはずである。それを脳に基礎づけることで、われわれは必要なら、そうした現象に対する原因療法を発見できるはずである。

もつとも私は、右のようなわけで、日本における漫画の流行や、日本人のいわゆる外国語下手を、病的現象だなどは夢にも思っていない。国粹主義的というなら、言語⁽¹¹⁾については、外国人のほう⁽¹²⁾がまさに「頭が足りない」のである。

(養老孟司『考えるヒト』による)

注 ソシユール……スイスの言語学者(一八五七―一九一三)。

〔問一〕 傍線(1)(6)(7)(8)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)「これが言語の恣意性と呼ばれるものである」とあるが、「言語の恣意性」の説明としてもっとも適当なものを

左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ある言語のある概念を示す音声とその概念を示す他の言語の音声とに法則性はない。
- B ある言語の音声とその音声を表記する文字との間に明白な結びつきはまったくない。
- C ある言語を表現する文字とその文字が意味する概念との間には類縁性が見られない。
- D ある言語を表現する文字とその文字の読み方との間に必然的な規則性はあり得ない。
- E ある言語の音声とその音声によって指示される概念との間にいかなる関連性もない。

〔問三〕 傍線(3)「音声上のパシヤンがサカナになり、サカナの絵が「魚」という恣意的な記号になるについては、あきらかな規則が認められる」とあるが、その「規則」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 視聴覚に共通な情報処理が近代言語の成立に必要なので音楽的表現は言語的表現へと昇華すること。
- B 視覚に固有な具象的特質は聴覚によって把握されなため言語体系の成立過程から排除されること。
- C 聴覚でしか理解できない擬音語は音楽的であるため視覚系の情報処理に適した記号へ進化すること。
- D 視覚や聴覚に特有な性質は次第に脱落していき言語体系における音声と文字の抽象性が高まること。
- E 音声上の記号と視覚上の記号は共通性を保持していないため両者は恣意的な記号へと変化する事。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのもっとも適当な六字の語を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問五〕 傍線(5)「こんな言語規則に素直に従っているから、日本人は権威に弱いのだ」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 日本語の読みは世界の他の言語に比較して異常に複雑であり悪魔的而非難されかねないが、外部の民族集団の決定した規範に日本人は唯々諾々として従っているから。

B 日本の漢字音は流入した中国語の意味に基づいた使い分けがあり十分合理的な面もあるが、そうした事実は教えられず無知のまま誰も自発的に知ろうとはしないから。

C 日本語に限らず言語とは本来恣意的なものであり、言語体系に合理的な規則性を求めても意味がないことを日本人は薄々承知しているので無意味な抵抗をしないから。

D 日本語に限らず言語はヒト間のコミュニケーションを可能にし社会を構築してきたので、日本人は特に言語に対して恩恵を感じていてそれに反抗するのは難しいから。

E 日本語の漢字の読み方は一見するとおおよそ合理的な法則が認められず、ただ訓練として覚え込まれるものであるにもかかわらず黙って受け入れて疑問視しないから。

〔問六〕 傍線(9)「カツ」と坊主が怒鳴っている」とあるが、「カツ」を表す漢字を含む表現としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 社会でカツヤクする B 会議をエンカツに進める C 以下をカツアイする

D カチマケに拘泥する E 真実をカツパする F カッスイに備える

〔問七〕 傍線(1)「言語については、外国人のほうがまさに「頭が足りない」のである」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本人は外国人に比べ、聴覚言語であるカナを処理する角回以外に、漢字を処理する脳のほかの部位を持っている。
- B 日本人は外国人に比べ、視覚言語である漢字を処理する角回以外に、音声処理する脳のほかの部位を持っている。
- C 日本人は外国人に比べ、聴覚言語である音声処理する角回以外に、漢字を処理する脳のほかの部位を持っている。
- D 日本人は外国人に比べ、視覚言語であるカナを処理する角回以外に、漢字を処理する脳のほかの部位を持っている。
- E 日本人は外国人に比べ、視覚言語である漢字を処理する角回以外に、カナを処理する脳のほかの部位を持っている。

〔問八〕 次のア～エのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A 近代言語においては視覚系と聴覚系とに共通する情報処理が脳内において重要であるので、視覚と聴覚以外の感覚に基づく記号体系は一般的に言語としては認識されていない。
- I 失読症のような脳の障害が日本人にだけ二種類あるという事実は脳の研究によって初めて明らかにされ、漢字の音訓読みがある日本人の脳は他より優秀であることが分かった。
- ウ 西欧語は古代ギリシャの時代から音声中心であり、日本語は視覚言語を非常に重要視するので、両者の相違を無視して日本における外国語教育を批判してもあまり意味がない。
- エ 日本における漫画の流行や外国語下手は一見病的現象と思われなくてもないが、こうした文化現象については脳を基本にして考えてみれば真の原因や対策の発見は可能であろう。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

芸術を、自然物であれ既製品であれ、ひとつの「物体」の次元にまで引きもどし、これと同一化せしめようとする態度を、きわめてあざやかに表明した最初の作家は、いうまでもなくマルセル・デュシャンである。壘^{びん}乾燥機や便器などの、デュシャンのいわゆるレディ・メイドのオブジェは、既製品を手を加えないでそのまま作品化した画期的な出来事であった。デュシャンの思想は、国旗や標的やビール缶を忠実に再現したジャスパール・ジョーンズをはじめとして、戦後の美術に大きな影響をあたえたが、それはとくに最近のコンセプチュアルな仕事に新たなかたちで復活している。画廊や美術館の床一面に敷きつめられたコンクリート・ブロック、積み上げられた石や材木や土、拡げられた金網などは、それがどこにもある自然物や既製品をほとんど変形することなく展示しているという点で、デュシャンの便器と軌を一にしている。われわれが「作品」として見る便器にしろ、コンクリート・ブロックにしろ、石塊にしろ、具体的なモノとしては、現実にあるそれらとすこしもかわらないし、表面的な視覚上の外観において、両者を区別するメルクマールはどこにもないといっている。

一九一七年、デュシャンはニューヨークのアンデパンダン展に便器を逆さにして、Richard Muttと署名して《泉》という題名で出品したが、ここで重要なのは、作者が手を加えてつくったかどうかということではなく、彼がまさにそれを選んでここに置いたというその行為 (Act) であり、それがここに置かれているという事実 (Fact) である。この事実によって、便器はそのままのかたちで現実に所有していた意味を失い、まったく別の「物体」、つまり作品として、「新しい思想」をもたらすことになる。したがってこの作品と現実の便器とを区別するのは造形的なフォルムではなく、いかなる事実でも作者がそう思えば作品たりうるといふひとつの思想を、それが提示しているところにもとめられるのである。

現代における Impersonal な傾向の作家たちの仕事は、まったくこのデュシャン的な思考にもとづき、その系譜につらなっているといえるだろう。かれらは作品を「つくる」ということがもはや物質に手を加えることではなく、物質を見出すこと、選ぶことであり、したがってそれは眼の仕事であるとともにより強く一定の構想に従った行為であるところに見ようとするのである。

一九六九年五月、ホイットニー美術館で開かれた「アンティ・イリユージョン／手続きと素材」と題する展覧会は、このような傾向の代表的作家二十二人が参加した大規模な企画展であったが、そのオルガナイザーのひとりであるジェームス・モントが、「この展覧会における多くの作品のラディカルな性質は、芸術家たちが新しい素材を用いているところにあるのではなく、作品を構想したり置いたりする行為の方が、作品のモノの品質よりも優位にあるという点にある」と述べているのも、同様の態度をいいあらわしたものである。

以上のように個々の作品自体よりも、それを構想し、選び、置く作者の行為が重要であるとすれば、当然それが置かれる場所と作品の関係が、ここでは大きな意味をもつことになる。つまり作品ひとつひとつの存在よりも、それがどこに置かれるか、どういう具合に置かれるか、観衆に対してどういう結びつきを示しているかというような事実、一言でいえばある場所にもたらされる特定の状況が問題なのであり、そういう状況の全体が作品なのである。作者は行為をつうじて物質と、それが提示されている周囲の空間と、その空間にある人間を含めた、あるひとつの状況をつくりだす。したがって作品の展示されるところが室内であるか野外であるか、またそのいかなる場所であるかという位置の問題が、たんなる物理的な空間ではなく、作品そのものの性格と内的につながる要因となる。われわれは個々の物質自体によって作者の行為を知るわけにはゆかない。状況においてこそ、われわれははじめてそれを実現せしめた行為を洞察することができるのである。

しかし行為を作品化する方法は、デュシャンのなきわめて観念的な手段によるほかに、もっと端的に、行為をひとつの肉体の運動としてとらえる態度もある。この方向の代表的な作家はジャクソン・ポロックである。ハロルド・ローゼンバーグがアクション・ペインティングと呼んだように、彼のもっともすぐれた仕事は、制作の過程における刻々の肉体の動きをそのまま画面に定着するといはたらきから成り立っている。カンヴァスを床に固定し、四方から絵具や塗料を全面にまき散らす、いわゆるドリッピングという手法による彼の作品は、瞬間的な肉体の運動とスピードを絵具のしたたりによって視覚化し、そのあざやかな軌跡となっている。

このようなポロックの絵画は、肉体のアクションの直接的な具現として、制作のプロセスを作品化したものといえるだろう。

もちろん伝統的なタブローにおいても、画面は瞬間瞬間の作者の手の動きの積み重ねとしての意味をもっている。しかしそれにもかかわらず完成された作品は、プロセスをそのままあらわすことなく、その最終の結果だけを示すものであり、絵筆を置いたときに作品は作者の肉体から切り離される。ポロックの仕事はそういう作者と画面との分離した関係を否定し、自己が作品のなかに入り込むことによってこれと一体化しようとしたのである。

ポロックに見られるように、(3)は、必然的にその行為の連続であるプロセスの重視につながるが、これはまた現代美術に見られるひとつの大きな側面である。作品を作品たらしめている価値が、制作の結果もたらされた固定したモノにあるよりも、ある状況をつくる作者の行為にあるとすれば、そのプロセスが重要な意味を有するのはいうまでもない。このような点から、現代では、ポロックのようにプロセスを作品のなかにいわば凝縮して視覚化するばかりでなく、さらにプロセスそのものを作品として示すような仕事もあらわれている。たとえば制作過程を撮影した映画や写真を展示したり、制作の行為自体を観衆に見せようとする試みが行われているのである。あるいはハプニングや舞踊、音楽、演劇などと結びついたさまざまなイベントも、この点から、過程だけの行為の提示といえるだろう。さらにこういう方向を徹底させれば、プロセスそのものも捨てて純然たる作者の意図や構想だけをあらわすということになる。つまり実際には作品をつくらないうで、その設計図、見取図、デッサンなどを、それ自体ひとつの独立した作品たらしめるのである。

以上、現代美術にみられるいくつかの、顕著な新しい傾向を指摘したが、実際にはこれらの現象は複雑にからみ合い、きわめて多彩な様相を呈している。しかしここに共通するひとつの重要な特徴は、ある特殊な物的存在としての完成された作品の形式が、それ自体だけではもはや大きな価値をもたなくなったということである。そしてこれに代わって、作者の観念、構想、行為、過程という、作品に先行する（かならずしも時間的にでなく、論理的に先行する場合も含めて）制作のプロセスが強調されてきている。作品の非物質化が観念の純粋な伝達を意図し、その非個性化が行為によるなんらかの事実や状況の設定を示すとすれば、それらはいずれも作品を過程化したものと見ることができよう。物質よりも観念、存在よりも関係、造形よりも構想、完成よりも未完成、結果よりも過程、モノよりも行為、個物よりも全体的状況に価値を置く現代美術の新たな志向は、作品を静的な

固定した実体から動的に関連する力の緊張へと解き放つのである。したがって現代美術における作品の意味は、モノとしての作品の存在のなかにではなく、むしろ流動する制作の過程のなかにとめられなくてはならない。作品はつくられた結果ではなくて、つくることそれ自体なのである。

(乾由明『眼の論理』による)

注 マルセル・デュシャン……フランスの美術家(一八八七―一九六八)。メルクマール……指標、目印。オルガナ
イザー……主催者。ジャクソン・ポロック……アメリカの画家(一九一二―一九五六)。タブロー……絵画作品
のこと。

(問一) 傍線(1)「既製品を手を加えないでそのまま作品化した」とあるが、本文におけるマルセル・デュシャンの芸術の説明として最も適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日用品の表層的な形ではなく、その物自体が有している潜在的な可能性を発見する。
- B 作品をどう造形するかではなく、いかに観衆の意表をつくことができるかを重視する。
- C ある物体に手を加えるのではなく、物体の形は保ったまま物体に新たな意味を付与する。
- D 新しい素材を用いるのではなく、使い古された既製品や自然物を芸術作品として活用する。
- E 芸術を日常から切り離して考えるのではなく、ありふれた日常の中に芸術性を創出する。

〔問二〕 傍線(2)「それが置かれる場所と作品の関係が、ここでは大きな意味をもつ」とあるが、その説明としてもっとも適当なものの中から選び、符号で答えなさい。

- A 物質と観衆との内的なつながりを観衆自身に納得させる最適な状況の発見が重要であるということ。
- B 物質自体が本来有している美的価値を最大限に発揮できるような場所の構築が重要であるということ。
- C 元来美を有していない物質を美として観衆に認識させるような環境の探究が重要であるということ。
- D 作者が物質で表現している美を観衆が最も的確に受容できる場所の特定が重要であるということ。
- E 個々の物質がどのように作品として存在しうるのかを示す状況の設定が重要であるということ。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 行為により作者と観衆の距離を短縮しようとする態度
- B 作品を率直な肉体の行為の次元に還元しようとする態度
- C 作品が完成する瞬間そのものを画面に定着しようとする態度
- D 制作過程を提示して作品の完成度を補完しようとする態度
- E 観念と肉体が一体化した状態に作品を解放しようとする態度

〔問四〕 本文の趣旨に合致するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 流動する制作過程を作品であるとみなす現代美術の立場からすれば、作者の構想をまとめた設計図やデッサンなどは作品の制作自体を放棄してしまっている点においてその範囲を逸脱する。
- B マルセル・デュシャンが制作した《泉》は便器という静的な物体をもって表現されたものではあるが、鑑賞者が持っている先入観を破壊するというその目的において現代美術たり得ている。
- C ジャクソン・ポロックは絵を制作するプロセス自体に重点をおくドリッピングという手法によって作者と画面の一体化を図り、絵画という芸術様式の枠組み自体を解体しようとした。
- D 現代美術にあつては制作の結果として造形された完成物の存在よりも、作者の構想や観念が芸術作品となる文脈を作る行為や、構想や観念を表現しつつある過程そのものが重視される。
- E 伝統的な絵画では最終的に物体として仕上がった結果が重視されるが、そもそも画面は絵を描く手の動きの集積であるという点において伝統絵画も必然的に現代美術の一面を有している。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

東山の春の曙、嵯峨野の秋の夕暮、艶なる心地してたをやぎたるさまこそしたれ、近きほどに、難波わたり、志賀の唐崎など聞こゆれど、都人はあからさまなる旅寝をだにものうくして、心やすくもなさずかし。まいて景色ある山の姿、ゆほびかなる海の上などは、西の国にこそ多かれと聞くを、心ある人こそ座しながら遊きをも知るといふなれ、もろこしも近くなる夢路も一向に見ぬ方には通ふことなし。あるはをかしう読み置けるふるごとをも見、おのづから人のゆかしからんと語りなすを聞き置きて、ながめがちなる春の菅の根、夢路にうとき秋の夜ごろ、ゆくへなく魂あくがれ、心かからぬ山なきに、見てしがと思ふ折多かり。画にかけるは今少し有様わかれ、見るかひある心地ぞする。

しかるに、安芸の人浅野某の主、住む所におもしろき高殿を造り、臨瀛閣と名づく。そのあたり見やらるる山のあるやう、海的心ばへ、林のたちど、水の流れまで細やかなる絵に作りて、このありさま、記に作るべきよし言ひおこせたるを見るに、しるべなく思ひやられつるよりは、こよなう目移りて、かつがその境に遊ぶらん心地ぞする。閣は南に向かひて、ゆほびかなる海原のさま、振りさけ見たよりあらんかし。辰巳にあたりて沖中に、嚴島おもしろく世みなせり。あだならん人には見せじといひけん、さることぞ見ゆる。何の浦 (7) など多く見ゆれど、知らぬことをさのみはとてなん。閣は三重ねに作りあげて、飛ぶ雁の数さへうつぶして読みつべう見ゆ。庭広かならんと見えて、木高き松、花の木、紅葉など故ありて立ち交れり。うとかなる垣根しわたして、なごやかなる入江の浪、かからんとおに世を尽くさばやと、いたづらに心を動かすわざこそ、なほ貫之の主にはもどかれぬべけれ、折につけたるながめは、げに墨書きの筆、限りあるなるべし。今この記にたぐひてもくはしきさまは書かまほしげなり。

(富士谷成章「臨瀛閣記」による)

注 難波わたり……いまの大阪市およびその付近の古称。能因の歌「こころあらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを」(後拾遺和歌集)がある。

志賀の唐崎……琵琶湖の西岸で港があったところ。柿本人麻呂の歌「ささなみの志賀の唐崎さき幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」で有名な歌枕。

近くなる夢路……「はるかなる蘆あしやおきのうきねにも夢路は近き都なりけり」の歌に基づき、都のことを表現している。

菅の根……長いものとされる。安芸……山陽地方の国名。いまの広島県あたり。

辰巳……東南。 殿島……安芸の国の名所。宮島。

あだならん人には見せじ……「あだならん人には見せじいつく島浪のぬれ衣きせんものかは」(夫木和歌抄)。

貫之……『古今和歌集』の撰者として有名な平安時代の歌人紀貫之。

〔問〕 傍線(1)「たをやぎたる」・(2)「あからさまなる」・(4)「ゆほびかなる」の意味としてもっとも適当なものを、それぞれ左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「たをやぎたる」

- | | |
|---|--------|
| A | 由緒ありげな |
| B | 優美である |
| C | 身近である |
| D | 色彩豊かな |

(2) 「あからさまなる」

- | | |
|---|--------|
| A | 気恥ずかしい |
| B | 短期間の |
| C | 派手な |
| D | 軽率な |

(4) 「ゆほびかなる」

- | | |
|---|--------|
| A | うねるような |
| B | 光まぶしい |
| C | 広々とした |
| D | 魅惑的な |

(問二)

傍線(3)「心やすくもなさずかし」とほどのような意味か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 安心して景色など眺められないかもしれないな
- B 親しく他人と交遊することもないでしょうよ
- C 気軽に旅に出ることなどもしないでしょうね
- D 安易に古歌を口ずさんだりしないでしょうね
- E 落ち着いて眠りにはつけないのでしょうか

〔問三〕 傍線(5)「心ある人」とはどのような人か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 歌の心得のある人
- B 思いやりのある人
- C 心に余裕のある人
- D 想像力のある人
- E 心眼を備えた人

〔問四〕 傍線(6)「見てしが」はどのような単語で構成されているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 動詞＋助詞＋助動詞＋助動詞
- B 動詞＋助詞＋助動詞＋助詞
- C 動詞＋助動詞＋助動詞
- D 動詞＋助動詞＋助詞
- E 動詞＋助詞＋助詞

〔問五〕 空欄(7)には「何の浦」と対になる言葉が入る。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A くれの隈
- B かれの隈
- C これの隈
- D どれの隈
- E あれの隈

〔問六〕 傍線(8)「なほ貫之の主にはもどかれぬべけれ」とあるが、なぜ貫之に非難されるというのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「白波の寄するなぎさに世を尽くす」という『新古今和歌集』の歌に基づく表現であるが、貫之とは時代違いであるから。

B 貫之は、画中の女に無駄に心を動かすようなものでまことが少ないと、歌人の歌いぶりをけなしたことがあるから。

C 散文で長々と書き尽くそうとしても、三十一音で世界を構成する貫之ら名手たちの和歌の表現にはかなわないから。

D 自分の心の動きをいかに表現しても、「人はいさ心もしらず」と逡観した人間観を持つ貫之には通用しないから。

E 『土佐日記』に貫之が逐一書き記したようなつらい長旅も実際には経験しておらず、机上の空論にすぎないから。

〔問七〕 傍線(9)「ながめ」は、この場合どのような意味か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 線描 B 眺望 C 長雨 D 物思い E 詠歌

